

榎茂都陸平が観た 1930年代ヨーロッパの舞踊

就実女子大学 桑原 和美

I はじめに

本研究は上方舞榎茂都流三世家元で、宝塚歌劇団の演出・振り付け兼舞踊教師であった榎茂都陸平が、1931（昭和6）年から1934（昭和9）年にかけて文部省嘱託として欧米視察に出掛けた際にヨーロッパで観た舞踊をめぐっての考察である。視察の主な目的は、日本舞踊の紹介と西洋舞踊の研究で、ウィーン、ベルリン、ロンドンに主として滞在したほかパリやアムステルダム、コペンハーゲン、そしてドイツ国内の各都市へも足を運んだ。なお、滞欧中に彼が各地で行った日本舞踊のレクチャー・デモンストレーションについては平成6年の第38回舞踊学会で発表した。

榎茂都は「春から秋へ」（大正10）など西洋の音楽やバレエの技術、群舞の技法をとり入れた作品を発表して新舞踊の旗手として注目されていたが、自分自身の舞踊にも、また社会の中の舞踊状況にも行き詰まりを感じ、新たな飛躍を期待して欧米への視察を決意する。彼は楽典を理解し、バレエやダルクロワーズのメソッドを独学して指導に取り入れたり、海外の文献を原語で読むという当時の舞踊家としては、希にみる知識人であり理論家であった。本研究ではそうした彼が実際にヨーロッパでどのような舞踊を観て、何を感じ、またどう受けとめたのかを、宝塚歌劇団の機関誌「歌劇」に掲載された滞在報告、著書「舞踊への招待」（全音楽出版社、1958）、見聞記、記録ノート、スケッチ、プログラムに基づいて考察する。

II 結果と考察

オーストリアの首都ウィーンには当時古典バレエ、リトミッシュェ・ギムナスティークから生まれた近代舞踊、社交ダンスを含めて大小百五十の学校が存在していた。榎茂都は人々が余暇に音楽やダンスを楽しみ、体操に汗を流す様子に日本人との国民性や文化の違いを強く感じ、自らも帰国後の指導に役立てようと社交ダンスの練習に通っている。近代舞踊家としてはロザリア・クラデアク、ボーデン・ヴィーゼル、イルカ・チェツラーク、ヘルラ・シュレーフェル、エリノア・トルディスらを挙げ、舞踊技術の高さを評価している。〈詳細は発表資料参照〉しかし作舞技術については比較的冷静な視線でとらえており、特に「リトミッシュェ・ギムナスティークやアクロバットを盛んにとり入れた舞踊化」の傾向を好ましいとは受けと

めていない。またここではハラルド・クロイツベルクとイボンヌ・ゲオルギーによる舞踊を渡欧以来観た中で第一位とし、絶賛している。

ベルリンで榎茂都は、渡欧以前から文献や人づてに聞いて期待していた舞踊の活況振りを実際に確認することになる。多くの著名な舞踊家や舞踊と体操の学校が存在し、健康美を礼讃する国民思想に立脚したりズミカルな体操に類する舞踊が盛んに行われるベルリンでは、滞在期間が約一年半にも及んだ。従って、舞踊鑑賞や見学の機会も多く、それらは詳しく滞在記等に記されている。（詳細は発表資料に示したが、ここでは紙面の関係で省略する。）

III まとめ

榎茂都の滞欧中の行動の様子を同時代に滞独した江口隆哉や執行正俊と比較してみると、関心とする対象の広がりと実際に見聞した舞踊の数、それについての記述の量や詳細さにおいて顕著である。滞欧中の彼は、一方で日本舞踊の家元として正統的な古典芸術を紹介するという責務を熱意を持って果たしながら、実に旺盛な好奇心と探求心を持って当時世界の舞踊文化の中心と考えられていたヨーロッパの舞踊を見つめ、可能な限り心にとどめ、また報告や見聞記、その他の方法で記録に残すよう努めた。また江口や執行が共にウイグマンの学校で近代舞踊の理念や運動の体系を体験的に習得することに熱心に取り組んだのに比べ、彼は舞踊の鑑賞と見学、そして舞踊の理論的な学習に力を注いだ。ただ、彼はヨーロッパの舞踊の傾向や様々な舞踊家の作品に対して賞賛を示すことはあまりなかった。とりわけ全般に舞踊が体操的で、次々と目新しさを競う状況には批判的で、また音楽と舞踊の関連や群舞の扱いなど作舞技術の未熟さを指摘することもしばしばであった。

彼の見聞はレビュー、寄席風のショウ、オペレッタ、種々の体操学校、社交ダンスと広範囲に及び、見学した学校では舞踊理念や練習方法だけでなく指導方法、経営方法も関心を示している。これについては宝塚や松竹で演出・振り付け家、教師として幅広い知識と能力が要求されていたことが大きい。

また榎茂都はラバンの舞踊理論、舞踊譜を理解することに、最も意義を感じ、熱心に取り組んだ。彼はヨーロッパで多くの舞踊を観ることで、日本舞踊が西洋の舞踊よりも優れた表現性を持っているという認識を強くしている。そしてその素晴らしさが文化の異なる西欧社会で理解されるには、ラバン譜のように普遍性を持った、なお且つ日本舞踊に適した記譜法こそが必要であると考えている。